

病理検査室の窓辺から

プロローグ

斉藤 隆三

PCL 飯田橋 病理・細胞診センター

現在、臨床から離れて病理組織診断の仕事をしている。仕事場では当然のことながら病理医に囲まれており、ここでの仕事もすでに15年になるが、かつては臨床医がここに加わることはほとんどなかった。そこで、臨床の現場とは違った感覚があるこの病理検査室から、さまざまな思い、気づいたことなど、病理組織検査に関わる話題を語っていこうと思う。まずはこの仕事に就きたいきさつから。

大学を定年退職するころ、その後の進路を決めなければならなくなった。そのとき大先輩の先生から突然声がかかった。その先生は皮膚科から離れて血清学の道に進まれ、大学病院などの検査部で仕事をしたあと、臨床検査会社の幹部に迎えられていた。その先生から皮膚の検体をみてくれる病理の診断医がいなくて困っていることを相談されたのである。

皮膚病理については皮膚科医になった初期より西山茂夫先生の教えを受けており、大学でも病理学教室の先生方とのカンファランスに顔を出していた経験から、病理組織をみることには抵抗がなかった。しかし突然のことであり、また、臨床から離れることの淋しさもあったので、しばらく考えて、少し仕事を試してから決めることにした。結局はそれから今日まで続けているのだが。

ここでの仕事は、大勢の病理医がそれぞれの個室で毎日コツコツと顕微鏡を覗いて報告書を書いており、まことに静かな環境である。多くの患者さんと毎日しゃべっていたこれまでの生活とは180度違った生活となっている。連日たくさんの標本が机の上に積まれ、依頼伝票に記載されていることを唯一の参考資料として、1つ1つの標本を診断するという仕事であり、簡単な疾患であれば一瞥で診断ができるが、難解な疾患では、あれこれ文献を参考にして悩みながらレポート作りをしている。依頼伝票の内容に不備があり、症状の記載がないものも多く、文字が読めなかったり、臨床診断が適当であったりと、さまざまな問題点に出合いながら、静かな部屋で自分のペースでやれることをよしとして、今日も顕微鏡を覗いている。

「診察室の四季」に代わり、新しく「病理検査室の窓辺から」が始まりました。